



幕末・明治期の日本で活躍したフランス人 (4)  
(エミール・エチエン・ギメ)

神戸大学 経済経営研究所  
教授 青山 利勝

ジャポニズムとはフランスにおける日本研究の総称である。明治初期はフランス人宣教師がキリスト教を布教する一方で、フランス語とフランス文化を日本に紹介し始めた時期にあたる。また、フランス文学の古典も翻訳され出版され始めている。他方、フランスにおいても日本の文化がフランスの芸術に影響を与え始めている。その契機となったのがジャポニズムである。このジャポニズムのフランスでの人気の高まりにはフランス中部の地方都市リヨン出身のエミール・エチエン・ギメという東洋研究者が密接に関係しているのである。その理由を「日本の開国—あるフランス人の見た明治」(フランシス・マクワン著)に沿って説明してみたい。

日本は江戸時代に200年以上に亘って鎖国を続けたため、ヨーロッパの国々にとって神秘的な極東の島国といったイメージがあった。このイメージは明治期に入り、開国された後にも続いていた。このためフランス人の間には次第に神秘の国日本の文化を知りたいという知的好奇心が育まれていったものと考えられる。

このフランス人の知的要求に応えたのがリヨン出身の実業家であったエミール・エチエン・ギメであった。彼の父親であるジャン・バチスト・ギメは、同じくリヨン出身の実業家で彼の発明した人造顔料(群青)は、漂白剤にも使われて、ギメ一家に莫大な資産をもたらした。こうした恵まれた経済状況の中でエミール・エチエン・ギメは芸術、陶芸、絵画、音楽、宗教といった多様な学問を学び、その興味は外国に広げられていく。彼はエジプトの考古学調査を皮切りに東洋の民俗学にも興味を拡大し、1873年にパリで開催された「国際東洋語学会議」などにも出席し、彼の著作を通じて東洋の研究者として名前を知られるようになっていく。

こうした中で彼は1876年にフランス政府から極東アジアの宗教調査を依頼され、日本に赴くことになる。ギメは友人の画家フェリックス・レガメーを誘って、二人は1876年8月アメリカの客船アラスカ号で横浜に上陸する。彼らはそれから10ヶ月間日本中を旅行して歩くことになる。関東では横浜、鎌倉、日光、浅草を訪れ、その後関西を訪れ、伊勢神宮、京都、大阪、神戸を訪れている。その旅行は馬や人力車を使ったものであった。

旅行中に二人は日本の風俗習慣が気に入り、また、日本の文化芸術に魅了されていく。彼らが日本を訪問していた時期には、神道が国家宗教に制定され、仏教が弾圧を受けていた。いわゆる廃仏毀釈運動が市民の間に広がっていた。ギメはこうした日本の宗教改革を詳細にフランス政府に報告書として提出している。一方、彼らはこの時期に当時焼却の危

機にあった貴重な仏像などを購入し、東洋のコレクションとして持ち帰ることができたのである。

フランスに戻ったギメは、東洋文化の普及に意を注ぐことになる。1878年パリで万国博覧会が開催される。ギメはそこで「極東の宗教」をテーマとした展示室を開設し、東洋の宗教作品、美術品、陶芸、絵画や友人のレガメーが描いた風物画などを公開する。そして、1879年にはリヨンのラ・テット・ドールの新開地にフランス政府の支援を得て、ギメ美術館を開設する。ここにこれらの展示品が陳列され、フランス人の耳目を集めることになる。この美術館は現在東洋の貴重な文物を集めて有名なパリのギメ美術館の前身となるものである。現在は一部がリヨン自然史博物館として活用されている。

ところでギメとレガメーが日本を旅行する以前、1868年にパリで万国博覧会が開催されていた。これには日本の美術工芸品が出品され、明治政府が日本の使節団を派遣していた。日本の使節団はパリに滞在してヨーロッパの科学技術の水準の高さに驚嘆し、ルーブル美術館ではヨーロッパ絵画の伝統と美の世界を垣間見て、そのスケールの大きさと迫力に圧倒されていた。しかし、他方パリ万博では日本美術に対する注目が高まり、日本の美術工芸品がヨーロッパに大量に輸入されるようになっていた。また、芸術家の間では日本の浮世絵、絵画などのモチーフや構図、色彩、輪郭線などの技法がヨーロッパの絵画とは本質的に異なる新鮮な感覚のものとして、驚きをもって迎えられた。そのインパクトは非常に大きなものであったと思われる。何故なら、行き詰まりを感じていたフランスの芸術に新風を吹き込み、新しい創造の源を日本の芸術に求めようとするジャポニズムと呼ばれる芸術運動が興ったからである。当時、日本の浮世絵の色彩や繊細なモチーフが、フランスの印象派絵画の作風に大きな影響を与えたことはつとに有名である。ジャポニズムの運動は単に文化芸術の領域に留まらず、日本の政治、経済、社会、宗教、神社仏閣の建築技術といった分野にまで拡大され、日本研究が盛んになっていった。

ギメとレガメーが日本を旅行した時期は、フランスでジャポニズムが勃興し人々の間に日本熱が広がりつつあった頃である。従って、前述のフランスに戻ってからのギメの東洋文化の普及活動は、ジャポニズムの隆盛に一石を投じる結果になったのは当然といえば当然のことであったと言える。

ギメは故郷のリヨンに東洋語学校を創設している。この学校は1879年2月に開校し、日本からも留学生を受け入れ日仏文化の交流促進に貢献している。また、日本を初めとする東洋文化の紹介を行うなどしている。この学校の創設は、絹織物の街リヨンの商業の活性化と国際交流の促進という実利を追求するものでもあったが、事業としては短期に終わっている。また、ギメは1900年に創設されたパリ日仏協会の副会長に就任し、友人のレガメーは日本通として事務局長に就任したりしている。この頃ギメはペンで、レガメーは絵筆で日本紹介に尽力していた。例えば、彼らが共同で発行した「日本散策」では、ギメが日本の風俗を日記風に描写し、レガメーが挿絵を描いたりしている。最後にギメは、彼の東洋のコレクションを展示するためにパリに美術館を建設することに情熱を傾ける。フランス政府の協力を得て、1889年11月にギメ美術館がパリのシャイヨーの丘に開館し、彼はそこの終身館長に就任する。ギメの日本文化をフランスに紹介し続ける情熱は最後まで衰えることがなかったのである。（了）